

## 宗教と戦争（その4）

大森 海太

有史以前から人間の争いごとのタネのほとんどは、鳥や獣と同じく生存圏の争奪に起因するのであって、昨今のウクライナ紛争とて同じこと。ただこれとは別に人間固有の要因として宗教による対立があり、とくに一神教の世界に顕著である。

三大一神教はどれも中東で生まれ、その中でユダヤ教は世界各地に拡散して二十世紀ようやくパレスチナに復帰した。ユダヤ人は各方面で優れた活動を行っているが、その選民思想は他者からの反感を招き、「約束の地」は先住民にとって許しがたいことである。

キリスト教は中心がヨーロッパに移って多方面で宗教上の争いを続け、新大陸やアジア各地へは布教と共に侵略、植民地化を進めた。近代以降、政治に占める宗教の役割は希薄になった。

イスラム教は中東から各地に拡大し、またギリシャローマの学術文化を引き継いで高い水準に達したものの、近代になって西欧キリスト教世界と役割が逆転し、現代では過激な思想が中東、アフリカなどで貧困と結びついたりして、緊張が絶えない。

これに対してインドで生まれた仏教の一部は東南アジアに移り、他方ではヘレニズムなどの影響を受けつつ北上し、中国を経て日本まで伝来し、阿弥陀様やら観音様やらお釈迦様が考えてもみなかった仏様たちが祀られている。

インドでは仏教に代わってヒンドゥー教が生まれ、ヴィシヌ神など多神教の世界となり、イスラム世界と対峙している。

中国の儒教や老荘思想を宗教として対比できるか分らないが、各王朝の末期には黄巾の乱だの太平天国だの新興宗教が跋扈して、滅亡の要因となった。

このように考えると宗教はそれぞれの地域の気候風土歴史と密接に関連しており、種族の生存圏争奪と絡み合いながら戦争の大きな原因になってきた。

二十一世紀になって世界的に新たな緊張が増しているなかで、少なくとも宗教上の要因については昔に比べれば減少してきたし、さらにこれからも緩和にむけて叡智がしぼられることを望みたい。